

平成25年度第4回政策会議

日時 平成25年11月1日(金) 14:00~15:00

会場 市長会議室

参集者 工藤市長 中林副市長 片岡副市長 山本教育長 秋田企業局長
谷口企画部長 川越総務部長 山田財務部長

次期函館市観光基本計画の策定について

◎対応 布谷観光コンベンション部長 伊与部観光コンベンション部次長
倉橋観光振興課主査

◆ 議題の趣旨 ◆

第3次の函館市観光基本計画が平成25年度をもって計画期間を終了することに伴い、次の時代に向けた函館観光の更なるステップアップを図ることを目的に、第4次となる函館市観光基本計画を策定するものですが、この計画素案に関して、内容を協議しました。

◆ 協議の結果 ◆

素案の内容は、一部修正をすることを条件に、了承されました。

◆ おもな発言 ◆

■伊与部観光コンベンション部次長

新計画の期間については、26年度から35年度までの10年間となっている。

第1章、計画策定の趣旨だが、本市は全国有数の観光都市であり、歴史、文化を始めとした観光資源を大切に守りながら、次の時代に継承していくことが必要であり、そのためには、市民、観光関連事業者および各種関係団体など全ての人達の指針となる観光振興ビジョンを明らかにしたうえで、市民が誇れる観光都市を実現していかなければならない。こうした背景を踏まえ、函館観光の更なるステップアップを目的に、この第4次となる函館市観光基本計画を策定することとした。

第2章、観光の現状と課題だが、人口減少により観光市場が縮小する中、観光入込客数の減少を、何らかの形で補っていく必要がある。

1点目として、滞在型および通年型観光へ向けた取り組みの強化ということで、これは広域観光の推進により地域経済への効果が高い滞在型観光の実現、また、夏季と冬季の格差を解消し、安定性を高めた通年型観光の実現に向け取り組んで行く。

2点目として、市民、事業者ならびに行政が各自の役割を担いながら、国内屈指の観光都市に相応しい受け入れ環境の充実を図っていく。

3点目として、国際化を見据えた新たな観光時代に対応した取り組みである。今後は、クルーズ船の寄港増加や、函館アリーナの建設などによるMICE（ミーティング、インセンティブ、コンベンション、イベント）の増加などにより海外からの観光客も増加することが想定されるが、各国や地域の文化、風習に対する理解を深めながら、きめ細やかな対応を実現していくことが必要である。

第3章、計画の基本方針だが、計画期間における最大観光入込客数550万人を

目標とする。また、本市は、観光による経済波及効果が非常に大きく、観光客の消費活動を拡大することが重要であり、宿泊数の増加や満足度の向上といった目標を設定し、地域経済に効果の大きい滞在型観光の実現を目指す。

次に、基本理念として、「人・まち・文化の宝石箱 新・国際観光都市 函館へ」、を掲げているが、これは、豊富な観光資源を宝石ととらえ、市全体を魅力に溢れた宝石箱にたとえたものであり、既存の観光資源をさらに磨き上げ、新たな観光資源も加えながら新しい国際観光都市を目指すものである。

次に基本方針だが、1点目、交流・にぎわいの創出として、平均宿泊数を平成24年度の平均宿泊数1.16泊から1.28泊に増やすこと、人数にすると、約30万人増やすことを目標とする。

2点目として、おもてなし・満足度の向上だが、観光アンケートによる函館の印象について、平成24年度結果では約60%がとても良いという回答だったが、これを平成35年度までに80%にすることを目標とする。

3点目として国際化の促進だが、来函外国人宿泊者数について、平成24年度約18万人を25万人、40%増を目標とする。

最後に、基本方針を読み解く5つのキーワード（函館ブランド・プロモーション・ホスピタリティ・もう一泊したいまち・MICE）を掲げることで、基本方針を具体的な施策に繋げていくこととした。

第4章、施策では、基本方針・5つのキーワードを促進させていくために、街並み・歴史的建造物の保全活用の推進をはじめとした19の施策を掲げている。

■工藤市長

滞在型と通年型観光というのは昔からの課題である。冬場より夏場が多いというのは北海道はやむを得ない部分はある。函館はスキー場などが無いから（冬場は）厳しいのかなと思う。

■布谷観光コンベンション部長

スキーをやりたいという人の中には、スキー場があればよいという人もいる。近隣自治体にはスキー場があるので、近くに温泉があるとか、さらには函館があると、そういう複合的な魅力を示していくことで冬場の観光客を呼び込める可能性としてはあると思う。

■工藤市長

近隣自治体や民間業者と連携しながら、複合的な魅力をPRすることも検討する必要がある。

その他の時期では、気候の良い6月から7月とか、9月から10月くらいの観光客をどう増やしていくか。これからは高齢者が多くなるなど、夏場の混んでいる時期や宿泊料金の高い時期を避ける人達が増えてくる。そこをどう掘り起こすかを考えないと。夏休み期間中でない安い時期のPRが必要だと思う。

冬場は、1、2月のイベントで、特に外国人が滞在できるようなメニューを検討する必要がある。

来函外国人客数について、今年が実質20万人として、今後10年かけて5万人しか増えないのは少なすぎる。これからはタイ、そして中国。10年後まで中国が入ってこないのは想定しにくい。最低でも30万人、5割増はいかないと。

■布谷観光コンベンション部長

外国人観光客数の目標値について再度検討する。

■川越総務部長

観光入込客数の目標設定の根拠について、北海道新幹線開業などの増要素があるが、東京五輪開催などの減要素もあるから、開業後は徐々に減っていくという推計にしているという説明があった方がいいと思う。

■山本教育長

観光入込客数の目標値550万人というのは、推計値と捉えていいのか。

■伊与部観光コンベンション部次長

計画期間中の入込客数を推計した中で、期間中の最大値を目標値にしている。

■工藤市長

目標値を新幹線開業時に達成し、以後減少していくというのも違和感がある。

■山本教育長

東京五輪開催時など減少する要素があるとしても、それをいかに減少させないよ
うにするか、ということ踏まえたものが目標だと思う。

■布谷観光コンベンション部長

前計画の目標値が750万人、今回が650万人となっているが、人口減少
などの現状を踏まえると、次期計画では、期間内におけるピークで550万人
という目標を考えている。

■工藤市長

35年度の最終年度に550万人を維持している形じゃないと、開業時に達
成してあと減る一方というのが、目標としてふさわしいのか疑問である。

■山本教育長

目標というよりも、現実的な見通しを示しているように感じる。

■工藤市長

計画期間に努力して最終的には550万人になるように、どこの時点とかで
なくて、35年度には550万人を達成するような目標にしたらどうか。

■布谷観光コンベンション部長

指摘の点を踏まえ、再度検討する。

■工藤市長

指摘事項等について修正の上で、本件は了承とする。